
高橋敏先生を送る

久留島 浩

本館研究部歴史研究系の高橋敏先生は、2005年3月をもって本館を定年退職される。先生は、第5展示室開室に尽力される一方、歴史研究部長を勤められるなど、館内の運営に携わられた。また、近世・近代史研究上での注目すべき著作を次々に発表され、一貫して本館の研究活動を支えられただけでなく、学界に対する学問的貢献にはまことに大きなものがある。以下、その足跡を簡単に追うことにしたい（先生の気取らないお人柄に鑑み、とくに研究業績の紹介については普通の文体で書くことをお許しいただきたい）。

先生は、1940年に静岡県にお生まれになり、1963年東京教育大学文学部史学科卒業、1965年同大学大学院文学研究科日本史研究専攻修士課程修了後、静岡県立高等学校で17年間にわたって教鞭をとられた。その後、1982年から1年間筑波大学付属高等学校教諭を勤められたのち、翌83年には群馬大学教育学部助教授となられ、1989年3月に同教授に昇進された。同年4月からは国立歴史民俗博物館歴史研究部教授に配置換えとなられ、現在にいたっている。この間、歴史研究部長・運営協議員を勤められるなど、本館の運営に尽力された。また、1999年からは総合研究大学院大学教授を併任され、研究・教育などに功績をあげられた。

まず、研究活動としては、伊豆韮山代官江川氏の研究を皮切りに、静岡県内の近世・近代史研究からスタートし、その後職場のある群馬県・千葉県へとフィールドを広げ、近年はさらに幅広く研究を進めてきた。きわめて旺盛な問題関心を持ち、多くの論著・論文を発表してきたが、その内容は大きく以下の4つのテーマに分けることができる。

第一は、先述した伊豆韮山代官江川氏の研究で、いち早く代官研究の重要性を提起し、その後の幕府領の研究にも大きな影響を与えた。

第二は、こどもや青年の教育や生活の実態に関わる研究である。この分野では、近世から近代にかけての民衆レベルでの教育活動を、手習い塾だけでなく、俳句・和歌などさまざまな文化運動をも含めてとらえるという新しい視点を出した。さらに、若者組の生活文化や旅の文化などにも目配りをし、近世の非文字文化・生活文化が近代に入ってどのように変質するのかについてていねいに跡づけた。この分野での最初の著書『日本民衆教育史研究』（1978年、未来社）は、いまなお近世・近代教育史では必読基本文献の一つである。さらに、フィールドを上野国原之郷村に移し、徹底したフィールドワークの成果を踏まえて、村の生活文化をトータルにとらえた『近世村落生活文化史序説—上野国原之郷の研究』（1990年、未来社）は、生活文化史の研究史上での評価はきわめて高い。こののち、『村の手習塾 家族と子供の発見』（1995年、朝日百科『日本の歴史』別冊日本の

読みなおす 20), 『家族と子供の江戸時代』(1997年, 朝日新聞社)で, さらにその論点を発展させた。近代の公教育(学校教育)へ統合される前の, 生き生きとした民衆教育に焦点をあてたこれらの研究の意義はきわめて大きい。しかも, 近代以降, 第二次世界大戦下の教育のあり方まで, 一貫して在地の生活者の視点から教育史を見直そうとしている点は, 教育史研究としても優れていることは更めて言うまでもない。なお, 上記の研究は, 近世から近代への時代の流れを, 在地の生活文化の観点から見通すという研究でもあった。ともすると明治維新の政治的・経済的改革による変化の側面を強調するあまり, 一般に近世と近代とが断絶しているかのような印象をもたれていることに反対し, 近世の村落の豪農・一般民衆が18世紀後半以降つくりあげてきた地域文化にこだわった。その成果が, 『民衆と豪農』(1985年未来社)であり, 当時の近世史研究で有力な学説であった佐々木潤之介氏の「世直し状況論」に対するもっとも実証的で有効な批判となっている。

第三に, 近世・近代移行期を対象として研究を進めるなかで, この時期に特徴的なアウトロー(博徒)たちに焦点をあてた研究を進めた。彼らの生き方, 地域社会との関係などを, 稗史も含めた史料批判を行いながら, リアルに描くことに成功した。『国定忠治の時代』(1991年平凡社), 『清水次郎長と幕末維新—『東海遊侠伝』の世界—』(2002年岩波書店), 『博徒の幕末維新』(2003年, 筑摩書房)などがその成果であるが, 軽妙な語り口や自身の持つ独特の個性ともあいまって, 読み物としてもきわめて魅力的なものになっている。近世・近代移行期のアウトローの世界を自らのものにしたとも言える。それは, 2003年, 国立歴史民俗博物館の企画展示『民衆文化とつくられたヒーローたち—アウトローの幕末維新史—』(3月16日—6月6日)で, 展示という形でも示されることになった。先生は, 企画代表者として, その永年の研究成果を展示というかたちで表現することに成功し, 実際に好評を博した。近世・近代移行期のアウトローへのまなざしは, 「義民」への研究にも通底していて, 佐倉惣五郎についても研究を進めた。その研究成果は, 同館企画展示『地鳴り山鳴り—民衆のたたかい300年—』(2000年3月22日—5月21日)などで示した。一見異なるように思われるこの博徒と義民は, いずれもこれまで正史では扱われなかった存在であるが, 民衆文化という観点からはまさしく「ヒーロー」であって, 一貫して稗史にこだわり続けるという研究姿勢とも関わって, この分野での新しい研究の地平を切り開いたと言ってよい。また, 19世紀の下総という, アウトローたちが跋扈する地域で, 「民衆教育運動」(生活改善運動)を組織した特異な存在である大原幽学にも焦点をあてて研究を進め, いくつかの論文・著書を発表した。

第四に, 訴訟についての研究をあげておきたい。村に残されたほんの些細な事件に眼を留め, 残された訴訟記録から, 江戸での訴訟の経過および江戸での生活を生き生きと描いただけでなく, 裁判を通じて見える近世の支配構造にまで視点を広げている。いくつかの論文のほか, 『江戸の訴訟』(1996年岩波新書)を発表した。大原幽学についても, 江戸での訴訟という観点からの研究を行っている。

研究上での特色は, 史料を博捜し, ていねいに分析するという, きわめてオーソドックスな文献史学の立場でありながら, 現地を踏査し, 筆子塚などの石碑をも分析対象とするなど非文献資料の

重要性を常に強調してこられた。その土地に生きた人々の生き様を、トータルに把握しようとするものであった。職場がある県内で必ずフィールドワークを行い、その調査過程での成果や収集した史料そのものに内在したテーマを発見するという研究スタイルは、その精力的な調査とあわせて、近世・近代史研究のモデルであるといえよう。また、徹底して民衆文化・生活文化の視点から近世・近代社会を一貫して捉えようという研究は、稗史を史料批判しつつ読み直そうという研究ともつながり、高橋敏史観とでもいべき独自の研究分野を確立したと評することが可能である。

さて、先生は、国立歴史民俗博物館では、歴史研究部の近代史研究部門に属され、第5展示室の開設に大きな力を発揮された。とくに、近世において差別された人々が解放運動に立ち上がっていく歴史を描いた展示、北海道「開拓」のなかでアイヌの人々の生活がいかに変容させられていくのかをリアルに描いた展示、関東大震災下の朝鮮人虐殺の展示を、多くの困難な状況を克服して実現することに尽力されたことは特記に値する。この展示は、これからも多くの観客に衝撃と感動を与え続けるものと確信している。

大学・大学院での教育では、上越教育大学をはじめとしてきわめて多くの大学に出講されて後進の指導にあたられたほか、自治体などが開催した講演会・古文書を読む会などの講師も、労を厭わず引き受けられ、研究成果をわかりやすく一般市民に伝えるという活動でも大きな成果をあげられている。ここでも、無声映画の弁士を髣髴とさせるような名調子は多くの観客を魅了した。

総合研究大学院大学では、平成11年4月に文化科学研究科日本歴史専攻が発足されるときから同大学院教授を併任され、大学院教育に尽力された。上記のような、徹底したフィールド調査に基づき、民衆文化・生活文化という視点から社会分析をおこなうという研究スタイルは、大学院での授業科目（日本の村落・日本生活史）でも貫かれている。論文審査委員・主任指導教員として若手研究者の指導育成に力を注がれるとともに、専攻教育研究委員会委員、入学者選抜委員会委員として、大学院の管理運営、教育研究に多大の貢献を果たされ、院生の博士号取得にいたる指導の範を示された。

先生は、研究者であることに固執され、ときに厳しく、後進のわたしたちに対して、きちんと研究することを強く求められた。実際に数多くの著書を、本館在任中、多忙ななかで公表され、身を以て率先垂範された。退任を記念する最後の歴博講演会で、先生独自の「近世社会像」を示され、同じ日に本館での最後の著書『大原幽学と幕末村落社会』（岩波書店）を刊行されたことで、あらためてわたしたちに大きな感銘を与えられた。先生の旺盛な研究関心がとぎれることなく、新たな研究を進められることを信じて、先生をお送りしたい。

(国立歴史民俗博物館研究部)